尼崎 東日本への支援続ける武庫中生徒会

「震災忘れてはいけない」

遺児への募金活動 間もなく3年

尼崎市立武庫中学校生徒会が東日本大震災の発生直後から続けてきた募金活動が間もなく3年を迎える。これまでに集まった募金は約150万円に達し、親を失った中学生の教材費に充てている。「私たちは阪神大震災も東日本大震災も直接は経験していないが、震災を忘れてはいけない」。阪神大震災を知らない世代が、息の長い支援を続けている。【米山淳】

被災地支援の募金を呼びかける武庫中学の生徒
＝尼崎市の阪急武庫之荘駅前で

「被災地への募金にご協力お願いします」「復興のために長期的な支援が必要です」。2月10日夕、同校生徒会のメンバー10人が尼崎市の阪急武庫之荘駅前で声を上げた。前月の募金結果を書いたチラシを配ったり、パネルを持ちながら募金を呼びかける。利用者は「寒い中ご苦労様」「いつも頑張ってるね」と募金に協力する。1時間半の活動で約4万円が集まった。

同校生徒会は震災発生後すぐに募金活動を始めた。当初は不定期だったが、震災から1年が経過しても復興の兆しが見えず「長期的な支援活動が必要だ」として2012年5月からは毎月11日前後の放課後に武庫之荘駅前で募金活動を続けている。2年の若松龍之介さん(14)は「震災は過去のものではなく、今も続いている。少しでも力になりたいという思いを毎月形にして届けたい」と話す。

当初は県を通じて東北に送っていたが、現在は毎年、交流会で訪れる宮城県気仙沼市立鹿折中学校で直接手渡し、遺児の教材費に役立てている。一昨年は同校の校長が武庫中を訪れ、震災で親を失った生徒の心情や進まない復興の現状について講演した。昨年は、鹿折中で野球の試合をして交流した。

気仙沼市を訪れた武庫中3年で元生徒会長の土屋恵市さん(15)は「長い時間が経過しても、道が荒れていたり、家が倒壊したままの場所もあった。野球をしている間だけでも楽しんでもらえて良かった」と振り返った。

支援の輪は広がりつつある。市内の中学校生徒会の集会で活動について発表したところ「一緒に活動したい」と他校の生徒から参加を希望する声が上がった。震災から3年となる今月11日には、午後3時半から同駅前で他の中学の生徒や卒業生と一緒に募金を呼びかける予定だ。

若松さんは「復興にはまだまだ時間がかかると思うが、被災地のことを忘れずに活動を続けていきたい」と意気込んでいる。

毎日新聞 平成26年3月9日(日)より